

企画展メニューが人気

レストラン杜の小径



三山夕子店長の15周年
「仙台文学館を訪ねるも
う一つの楽しみはレストラン
杜の小径で食事すること
です」。こう話す人が少な
くない。文学館が企画する
展示会の作家にゆかりの定
食メニューを創作して、食
と文学のコラボレーション

を楽しませてくれるからだ。文学館の開
館以来15年間、ともに歩んできたレスト
ランの三山夕子店長Ⅱ写真Ⅱに取り組
みを振り返ってもらった。
「おいしかった。また来るね。そう言っ
てくれるお客さんの言葉に励まされて15
年間やって来られました」。三山さんは
お客への感謝を述べるとともに、開店を
薦め、支援してくれた人たちへの思いを
口にした。まず挙げたのが万葉集研究の
学者歌人扇畑忠雄さん。文学館の開館に
功労のあった人で、三山さんの料理の腕
や読書家なことを褒めながら推薦して
くれた。井上ひさし前館長は開店当初の客
入りが悪い時期に率先して蕎麦を食べ、
コーヒを飲み立ち寄った。セミナー
の受講者にレストランの利用を呼び掛
けてくれた。阿氏は共に故人となった。

私と郷土と文学 ④

私は福島県南相馬市生まれですが、こ
の地に文学という係わり合いはないので
す。郷土の範囲を広げて、東北と言うこ
とにすると、思い当たることがあります。
それは秋田県です。仕事の関係で秋田市
に五年ほど住みました。仕事はクルマの
営業だったので、秋田県を隈なく走り回
りました。冬の吹雪には往生しました。
一寸先は闇と言いますが、吹雪の夜道は
文字通り白い闇というところ。す。
ちよっと進んで止まるような日もあり
ました。

吹雪の中の《なぜ》

が良い知恵は出ませんでした。秋田を離
れてからは単なる吹雪の中の暇つぶし
だったのだ、と思っていました。
ところが二〇年後、定年になると、《な
ぜ》が解けない悔しさか、吹雪の怖さが
骨身にこたえてか、真つ先に秋田の古代
史の本を読みだしたのでした。
いくら調べても記録にはありま
せんでした。欲求不満が募るばか
りです。不満が高じて、はじめて
『北に吹く風』という歴史小説らし
きものを書いたのです。そして現
在、文章を書いたり、読書会に参
加したりしている下地は秋田で身
に染み付いた《なぜ》なのだといつて
もいいのです。従つてタイトルに
端的に答えるとすれば、秋田県と
歴史小説、ということになります。
(宇津志勇三)

文学の杜

仙台文学館
友の会会報

第46号

=15周年記念特集=

平成26年11月30日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内)

〒981-0902

仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話 022(271)3020

仙台文学館のホームページ

http://www.sendai-lit.jp/

文学を友に交流の輪を

友の会会長 渡辺 祥子



友の会の十五年の歩みは、
仙台文学館の歴史と共にあり
ます。設立前の準備期間から
関わってこられた諸先輩方の
働きがあったからこそ、現
在の友の会活動。その熱い思
いを引き継いで、新役員会と
して活動を始めて五年になり
ます。私自身は力不足の感が
いつまでもぬぐえず申し訳な
い思いでいっぱいですが、役
員の皆さんや、会員の皆さん
に支えられ、このような節目

の時に会長として関わらせていただける
事を、有り難く思っております。
ルワンダにこんなことわざがあるそう
です。「友だちというのは、あなたの心
のメロディーを知っている人で、あなた
が自分のメロディーを忘れた時、そのメ

文学のはじまりを見た

仙台文学館館長 小池 光



友の会の十五年の歩みは、
仙台文学館の歴史と共にあり
ます。設立前の準備期間から
関わってこられた諸先輩方の
働きがあったからこそ、現
在の友の会活動。その熱い思
いを引き継いで、新役員会と
して活動を始めて五年になり
ます。私自身は力不足の感が
いつまでもぬぐえず申し訳な
い思いでいっぱいですが、役
員の皆さんや、会員の皆さん
に支えられ、このような節目

充実した会報の発行も、年三回の計画
をきつちり守り、四十六号まで停滞する
ことなく続けられてきた。無償の尽力を
思えば頭の下がる思いである。これから
も一層精力的な活動をして下さるよう、
お願いしたい。

歳月を感じる思い出話だ。
開店1年目は客人の少なさに苦労し
た。2年目からは展示会に合わせた特製
のメニューを考え出して、人気が高まっ
ていった。第一作は石川啄木と寺山修司
展の時に啄木ゆかりのメニューとして、
ひつつみ(はつと)。これがヒットして
満員になるほど好評を博した。三山さん
は啄木の郷里の岩手ばかりか函館へ出か
け、募参りをしてアイデアを練った。
宮沢賢治展では、花巻へ3度も出かけ、
風土や特産品を探った。松本清張展では、
福岡や小倉へ飛び、小倉饅頭やもずく酢
を採用。これまで創作したメニューは夏
目漱石、林芙美子、小林多喜二など40品
以上に上る。最も人気を博したのが藤沢

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第
46号をお届けします。今号は、仙台文学
館開館・友の会発足15周年記念特集とし
て通常より増頁の特別版です。いつも編
集を担当していただいている、友の会役
員の阿部友康さん、宇津志勇三さん、佐
野のおさんに加え、会員の一字ひろみ
さん、近田裕子さん、長沼和子さんの6
名で編集を担当していただきました。あ
りがとうございました。
(友の会事務局・伊藤)

▽10周年記念特集号編集の時は私と事
務局の伊藤美菜子さんと2人だけだっ
た。今回は編集スタッフが7人。本格的
な座談会をはじめとする充実した特集号
になった。編集会議で文殊の知恵を出し
合い、作業分担で進めた成果だと自画自
賛したい出来上がりとなりました。(友
の会事務局・伊藤)

周平展で出した「海坂藩の食卓」・庄内の
味わい。棒鱈の煮付けが大好評だった。
毎年年末に出す正月用の仙台雑煮は長蛇
の列ができるほどの人気がある。

◆会員情報コーナー◆

▽境敷樹さんが代表を務める「みやぎ
聞き書き村草子舎」は「草子第十五集」を
出版しました。震災体験や原発被災体験
をはじめ農業者や身障者福祉関係者の聞
き書きを収録しています。
▽菊田郁朗さんの詩「無常の点滅」が、
国民文化祭現代詩フェスティバルで、日
本詩人クラブ会長賞を受賞されました。
おめでとうございます。

な気がしてならない。
(宇)
▽自宅療養中の友人を大阪に見舞っ
た。手土産は、50年前の学生時代にふた
りよく食べた焼き菓子である。「あ、
これ懐かしい」と包装紙に顔がほころ
ぶ。ふるさとのお菓子は、すっかり大阪
の人になっていた友人を、しばし仙台の
頃の若い顔に戻したようであった。(佐)
▽15周年記念号の佐伯さん、佐々木さ
ん、渡辺さんの鼎談は文学館の果たす役
割のこれまでとこれからがよくわかりま
す。もう一度じっくりお読みいただくと
嬉しいですね。季節は秋、読みかけの本を
ポケットに入れてふと出かけたります目
的のなしの旅もいいものです。(二)
▽元々そっけなく、性分である。それ
に加えて早とちりの頭在ぶりを思い知っ
た。今回座談会の編集に関わっての個人
的反省、チーム作業でよかった。(近)
▽友の会が誕生して15年、高校受験を
控える中学3年生だ。特集号に寄せられ
た文章は家族のように温かく、座談会は
励ましと指針を示す師のようである。十
五の春、志を持って旅立つ会員にとって、
友の会はいつともそこにある寄港地、より
どころであって欲しいと思う。(和)

ロディーを思い出させてくれる人です」
文学は、この、友だちのような存在な
のかもしれない。また、木や草花にとつ
ての水分のように、心を潤し豊かにして
くれる存在でもあるのではないでしょ
うか。東日本大震災以降、改めてそんな文
学の必要性を痛感し、身近に文学の世界
に親しめる文学館がある事の幸を思い
ました。と同時に、友の会の活動の在り
方もまた見えてきたように思います。
「文学を通して、楽しい交流が出来れ
ば」と、就任して最初の総会でお話しし
ました。日常の中に、皆さんと気軽に交流
ができる場を、これからも作っていきたく
いと考えております。ぜひ気軽に参加
ください。そして、文学を通しての輪を、
もつともつと広げて参りましょう。今後
とも、どうぞ宜しくお願い致します。

郵便の配達時間は毎日ほぼ一定して
いる。バイクが家の前に止まって、カ
タンと郵便物の入った音がするとすぐ
にでも出て行くたくなる。止まらずに
行ってしまった時など、ひどくがっか
りする。
ハガキは小さなスペースなので、な
げない日々の暮らしの中で、あれ
れを手軽に書くことができる。手紙は
書き出せばつい長くなってしまふの
で、よほどのことがなければ書かない。
しかし貰うと心弾む。
十七世紀、ポルトガルの僧侶が、駐
屯していたフランスの士官に恋をす
る。やがて自分を捨てて本国へ帰って
しまったこの男に、尼僧は一方的に五
通の手紙を書き送る。初めは自分の恋
情を吐露し、哀願と恨みに満ちたもの
だったが、手紙を書き続ける
うちに、相手の立場を思いや
り、自分を取り戻して行く。
最後の手紙には、別れは仕方
のないことと諦めるきつぱり
とした言葉が綴られる。この
「ポルトガル文」(リルケ記)
では、手紙を書くという作業
によって次第に冷静になる尼
僧の心の変化が見えてくる。
「谷崎潤一郎」渡辺千景は
創作のエネルギーとして、千
萬子は自分を理解してくる
唯一の人として、お互いを必
要とした。その二人の抜きさ
しならぬ感情が濃密に交わさ
れ、谷崎の情愛と若い千萬子の現実が
せめぎ合う。とても冷静とは言えない。
手紙は、他人に読まれることを考え
て書くものではない。相手に届くこと
だけを思っ書く「心の直球」である。
ここに手紙というものの真実があるの
だと思ふ。たとえ冷静であっても、ま
たそうでなくとも。
eメールや電話よりも時間がかかる
けれど、投函した場所の消印が押され、
その人の文字で書かれた郵便物を手に
するのはいれし。季節に合った手紙
や絵ハガキに目も喜び、書き手の小さ
な作品を受け取るような気持ちになる。
赤い箱に様々の想いを積んで郵便バ
イクはやって行く。その響きを今日も
耳を澄ませて待っている。(佐)

文友一滴

この印刷物は再生紙を使用しています

施設見学会・文学散歩の歩み

(平成20年以前は10周年特集号)

- 2009(平成21)年7月 第19回施設見学会・山形市の「山寺芭蕉記念館」「シベールアリーナ・運筆堂文庫山形館」「山形県郷土館文翔館」など
- 同年11月 第20回・大崎市古川の「吉野作造記念館」。田中昌亮館長による作造についての講話
- 2010(平成22)年7月 第21回・福島県南相馬市の「壇谷島尾記念文学資料館」
- 同年12月 第22回・宮城県大和町の「原阿佐緒記念館」、大衡村の「ふるさと美術館」。歌人の佐藤通雅さんによる解説、朗読家の渡辺祥子さんによる朗読
- 2011(平成23)年 東日本大震災(3月)のため、例年7月に行う施設見学会は中止
- 同年11月 第1回仙台市内文学散歩・「東北大学史料館 魯迅記念展示室」と魯迅の学んだ階段教室を見学。東北大の永田英明准教授による解説。春秋2回の施設見学会のうち、秋の方は仙台市内か近郊の文学散歩に切り替え
- 2012(平成24)年7月 第23回施設見学会・岩手県北上市「サトウハチロー記念館」、「日本現代詩歌文学館」、俳人山口青邨邸・雑草園
- 同年11月 第2回文学散歩・若林区新寺の松音寺にある只野真葛のお墓見学。同寺の一室を借りて真葛についての解説講座。講師は早坂信子さん
- 2013(平成25)年7月 第24回施設見学会・正岡子規「はて知らずの記」にちなんで、関山街道をバスで通り、山形県天童市へ。解説は文学館の庄司潤子学芸員。天童では天童公園、出羽桜美術館、斎藤真一美術館を、帰路は作並温泉の岩松旅館を見学
- 同年10月 第3回文学散歩・仙台市青葉区「晩翠草堂」。草堂の一室で、詩人の前原正治さんによる「晩翠と晩翠賞と私」の講座
- 2014(平成26)年7月 第25回施設見学会・岩手県盛岡市「もりおか啄木・賢治青春館」、渋民の「石川啄木記念館」、渋民公園内の啄木歌碑
- 同年10月 第4回文学散歩・仙台市宮城野区の榴岡公園(天満宮)句碑、歌碑。俳人渡辺誠一郎さんによる解説で多くの文人が立ち寄った名所の歴史を学ぶ。「仙台市歴史民俗資料館」では畑井洋樹学芸員による解説で戦争と庶民についての展示見学

見学会 盛岡での昼食会



文学散歩 松音寺での講座



（詩人）

（編集者）

文学館と私 15周年記念に寄せて

武田 二つじ

千倉 由穂

僕が詩人としての活動を始めて、すぐに仙台文学館が開館しました。なので、勝手に仙台文学館を同級生のように思っているところが僕にはあります。実際、仙台文学館では毎年いろいろな形で、詩のライブを企画してきました。もう10年以上も続けて仙台文学館で詩を読んでいます。そして、作品も書いています。もちろんそれだけ付き合えば長くなると読み返したり、思い出したりすると、思わず恥ずかしくなってしまうものもありますが、そういうところも含めて、僕は仙台文学館と一緒に作品を作り、発表してきたんだと思います。仙台文学館へこれからのいろいろあると思いますが、よろしく願います。

（詩人）

「仙台文学館」の緑の看板が見えてくると、駆け出したくなる。文学館は、青春だ。高校時代、文芸部だった私は文学館を訪れる機会が多かった。松山俳句甲子園の地方予選大会のディベートでは、マイクを持つ手が震えたことを覚えている。高校総合文化祭では俳句部門分科会に参加し、他校生と句会をして盛り上がった。ここで、興奮も喜びも時には落胆も味わった。大学進学の際上京し、今春に東京で社会人となった今も、訪れる度、文芸に燃えていた高校生の私たちの姿を思い出し、これからの生きていく力になる。

（編集者）

サポーター活動 七夕作り



◆10年以上も前、山本周五郎展に併せた伊達騒動の講話があった。聴講の後、周五郎がつくり出した「樅の木は残った」に、伊達騒動の真実を垣間見たような感慨に浸り、背筋をのびしながら当館を去った思い出がある。(其田敏美)

◆10周年記念の時、池にヒヨッコリヒヨウタン鳥が浮かんでました。まるでメルヘンの世界。買い求めた桜桃を食べ、ヒヨッコリヒヨウタンジーマと、鼻唄で懐かしい昔々の思い出に浸りました。文学館の演出に感激！(佐藤美知子)

◆見学会は楽しい。どんな方が文学に興味を持っているのか初めて顔をあわせるバスの中、自己紹介。メインの見学会を終えて帰路。感想会では旧知の仲のように今後共楽しみにしている。(後藤文次)

◆毎年、見学会楽しく参加させていただいております。バスの中で学芸員さんに説明していただき、又行った所の館長、学芸員さんの説明は勉強になります。病氣もせず今迄元気です。ありがとうございました。感謝しております。(喜田章)

◆井上ひさし先生とご縁で友の会に入会。僕にとって嬉しかったのは高校時代の恩師と25年ぶりに再会できたことです。そんな出会いの場所を与えてくださったのが仙台文学館です。15周年おめでとうございます。(遊佐慶一郎)

◆初代館長井上ひさし先生は、杜の小径によく顔を出されてカウンターの周りです。私達には「文学館を立派に育てるには、杜の小径の力も大事なんだよ」と云

◆文学館の仙台朗読祭で「三十年振りに再会した母の手紙」を朗読。福島からの参加者から「今のお手紙は私に生きる勇気を与えてくださいました」と寄せられました。被災地からかけつけたこのご婦人の声はいつまでも忘れられません。思い出に涙がでます。(童風)

◆前橋文学館は市の郊外にあって、前橋にゆかりの人物の展示や紹介(ビデオ)などがあったよかったです。それから、文学館の近くを川が流れていました。(SS)

会員からの100文字メッセージ

- ### 仙台文学館友の会の歩み
- 1999(平成11)年3月28日 仙台文学館開館。仙台文学館友の会設立発起人会発足。10月、友の会設立総会。会長に鮎貝盛秋氏
 - 同年11月 「仙台文学館友の会会報」の創刊号を発行。第2号から「文学の杜」の名称に
 - 2000(平成12)年6月 第2回総会で施設見学会、学芸員による展示解説の実施を決議
 - 同年9月 「金子みすゞの世界展」で友の会が書籍、絵葉書などの販売に協力
 - 同年12月 友の会の自主事業「チェンパロとフルーツの対話」開催
 - 2002(平成14)年1月 会員研究発表会「文学の考古学 相馬黒光「広瀬川の畔」を読み解く」(発表者は渡邊慎也氏)
 - 同年3月 仙台文学館運営協議会の委員と友の会役員との懇談会。12月 井上ひさし館長と友の会会員との茶話会
 - 2004(平成16)年2月 会員限定の井上ひさし館長講演会
 - 同年7月 会報第15号から発送作業は会員のボランティア方式で実施
 - 2005(平成17)年7月 会員限定の井上ひさし館長講演会。9月 宮尾登美子サイン会
 - 2006(平成18)年6月 友の会サポーター制発足。会報の発送、見学会の世話役など活動
 - 2007(平成19)年3月 井上ひさし館長が退任。4月 小池光氏が新館長に就任
 - 2008(平成20)年5月 土井翠琴と島崎藤村の詩碑拓本を友の会から文学館へ寄贈
 - 2009(平成21)年3月 友の会会報第29号・10周年記念特集を発行
 - 同年5月 友の会総会時に井上ひさし前館長と友の会との懇談会
 - 2010(平成22)年2月 10周年記念事業として友の会主催の沼沢郁子朗読会を開催
 - 同年4月 総会で新会長に渡辺祥子氏を選出。他の役員も大幅に入れ替わる
 - 2011(平成23)年7月 東日本大震災(3月)のため3カ月遅れで総会、活動再開
 - 同年8月 新事業として読書会スタート。第1回は井上ひさし「父と暮せば」。隔月開催
 - 2014(平成26)年5月 総会時に小池光館長による会員限定の啄木講座を開催
 - 同年11月 友の会15周年記念で会報の特集号を発行(8ページ)。編集委員6人

（多田みどり）

十五年という時間

渡辺 友の会15周年ということで話をしたいと考えています。佐伯さんは文学館ゼミナールで受講者との触れ合いの場を作っていらっしゃいますね。

佐伯 仙台は文学的な文化があったといえなかった。少しずつ作家が出てきて、注目される土地柄になりました。文学館ができたということは大きかったと思います。ゼミナールの読書会は、最初から応答形式の読書会にしました。読者の具体的な顔が見え、皆さんの感想に答えられることはあります。個性のある方々との出会えるのは楽しいですね。受講者や読者との距離感がいいと感じています。

さし先生の写真を開館前から撮っていらして、今は友の会の会員証の写真もお願いしていますね。

佐々木 文学作品を写真にすることが好きで、井上さんは追っかけのように撮り続けていました。息子の名前をヒサシにしたくらい。文学館ができてからは在仙作家、仙台に縁のある方、ライブ文学館、講演、展示、だいたい全部撮っているのですね、相当な人数になってますね。

渡辺 実際に作家と触れ合って、写真が変わっていったというところはあるんでしょうか。

佐々木 作家が身近になり、刺激というよりは影響を受けます。

佐伯 中学生の時に遠藤周作さんの講演

出席者

- 作家・友の会設立発起人 佐伯 一麦さん
- フリーアナウンサー・友の会会長 渡辺 祥子さん
- 写真家・友の会会員 佐々木 隆二さん

15周年記念座談会 文学館友の会これまでとこれから



文学館に来る習慣が大切 写真通じて作家が身近に 震災乗り越え次の15年へ

佐伯 佐々木 渡辺

思ったと話された。それを聞いたときに、やつてよかったと思つた。それは忘れられないことで、参加者に教えられた大きなことの一つです。僕自身が文学の言葉で震災を表現するにはまだ時間がかかるが、震災を特別なことにするような視点をとりたくないですね。例えば、太宰は東京大空襲の後に『ヴィヨンの妻』を書いた。しかしそこに焼け跡の風景は無く、焼け跡で生まれた男女の恋愛の話、そういう神話的なものを書いてる。そういうことを少しずつやろうとしています。

渡辺 震災後、自分の言葉が空虚に感じられ焦燥感が苛まれた時期に、小説や詩を読んで感情や感覚が呼び覚まされた体験をしました。文学に触れ、語り合うこ

とを大事に友の会の活動をしていきたいと、震災後の総会で話したことを思い出していました。

佐伯 文学というのは無力感とか徒労感が根つ子にあつて言葉を発する。現実には、はっきりしたわかりやすいものではない。そういうものに理解を持つている人達が文学館に集うということは救いがあると思います。

佐々木 震災後は福島から岩手まで歩きまわりました。記録として撮らなきゃだめなんじゃないか、と自分に言い聞かせていたんです。始めのうちは話を聞く方が多くて、撮るといふ力が起こらなかつたですね。でも、だんだん撮れるようになってきたんです。写真を撮るといふのはど

を聴いた。初めて作家に間近に触れたのがこの道に入る大きなきっかけだったんです。その後私が作家になり先輩作家と会って、語り口や口調に直接触れると読んできたものの理解が深まる。作家も普通の人間だと感じることができるようなんです。

渡辺 息づかいを感じて読むと違ってくるんでしょね。文学館は作家や文学を身近に感じさせる存在なんだと改めて思います。

佐々木 文学館というのは遠くのものに近くするというのはあると思いますね。渡辺 友の会は文学の世界を共有する良さがあるのかなと思います。写真家としてだけでなく、文学ファンとして関わっている感じというのはお持ちですか。

佐々木 フライングから覗いて見るという視点を常にどこかに持っているような気がするんです。それは文学館とか文学についてもあるような気がします。

渡辺 その視点から見て、15年間の変化を感じられますか。

佐々木 当初は遠くて不便だという声が聞こえてきた。今は聞きません。食べ物に例えたとね、展示、これはご馳走がありますというお知らせかなと思うんですね。私達はそれを食べたり味わったりしますよね。料理のように思うというのは、文学館が身近になって浸透してきたということだと思つてます。今は文学館が料理を紹介しています。友の会もご馳走されるだけじゃなく、提案したり、一緒にレシピを考えたり料理を作ったりね。友

ここに焦点を合わせなければならぬ。フライングで切り取らなきゃダメなんです。どこを撮ったって真実ではないと感じてかなり苦しみました。熊谷達也さんの「360度見渡しても全部が震災地。だからどこが本当なんだっていわれどもわからない」という言葉に会って「あつ、これだったんだ」と、すごく合点がいき納得したという気がします。今「復興コンサート」の記録をしています。ようやく復興住宅に移った方とまだ仮設にいる方、表情が違いますね。それはつくづく感じます。私は気仙沼の生まれなんですけど、親戚も同級生も亡くなつていんです。客観的には撮れないですね。それは今も変わらないような気がしています。

佐伯 震災を体験して先ず反省しなければならぬのは、阪神淡路大震災に対する想像力がなかつたということですよ。確かに映像だけでは伝わらないものがある。けれども文学の想像力とは、被災者の現状はそんなものじゃないとシャットアウトするんじゃないかと、コミュニケーションをとることだと思つてますね。

友の会の成長・夢と希望

渡辺 最後にこれからの友の会について、佐伯さんはどうですか。

佐伯 書くように読む人を育てることも大事だと思つてます。一方的な見方で小説は書けないし、読む方も一方的な見方ではなく、読むことで自分との違いを感じ、それを認めるというようですね。それ

の会がそんな役割も持てればと思つているんですけども。

佐伯 読者企画の文学展というのがあつてもいいでしょうね。文学館に来る習慣を持つ人が増えたのは確かで、文化を共有するには大きなことです。大事なのは習慣なんです。音楽や映画だって、習慣がない人がコンサートや映画館に行くのは大変なんだよね。文学館で定期的に展示やゼミナールがあると、敷居は低くなるって考えるわけですね。ゼミナールで話すということは、最初はこちらも敷居が高かつた。今はみんなの意見を聞くのを楽しみに出かけてくる、随分ならしてもらつたところはありますね。文学はコミュニケーションの手段でもあり、人間に対する興味は文学の一つの源泉だから、こちらも観察させてもらつていくわけです。文化は提供する方も受け手も地道な努力は必要なんです。

東日本大震災と文学

渡辺 さて、2011年の東日本大震災から3年半経つてどんなことを思つていらっしゃるでしょう。

佐伯 9月からの「雪国を読む」の準備をしていて震災にあつた。それでも予定通り5回連続でできた。90歳近くの受講者が、戦争の時に「大菩薩峠」を読んでいて、こんなものを読んで将来人非人になるといわれたというエピソードを話された。その方が、こういう状況の中で川端を読んで、川端も戦時中に男女の恋愛話を書いていた、そのことは認めたいと

から子供達。絵本の展覧会とか、文学館に触れた人、そこから作家が生まれて欲しいと願つていんですよ、正直。まだ自分の言葉で表現できない子供達が言葉を持って表現したら、震災も書けるんじゃないかと。そういう夢は持つていますし、できるだけの応援はしたいと思つていますよ。仙台にこれだけ作家が生まれてきて、仙台を大事にしていることがいいんじゃないですかね。

渡辺 佐々木さんはいかがですか。

佐々木 重複しますが、企画まで関わるとか、そういうところまで入る機会があればいいなと思います。写真の一番の目的は記録性にあると思つてますね、上手い下手ではなくて。記録性のある写真として、文学館や友の会を撮っていきたいと思つてますね。

渡辺 佐々木さんの写真に、いろんな変化が写つていくと思つてますね。

佐々木 そうですね。そういうお手伝いができると思いますね。

佐伯 それから、食堂も欠かせませんよね。「杜の小径」も、三山さんも欠かせませんよ。

渡辺 文学館の方々、三山さんも含めて、文学館が育つていけばいいなと思つています。

佐々木 そうそう、互いに利用しあつて、せつせと通うことで身近にしていきたいですね。

渡辺 貴重なお話をうかがいました。次の15年に向けて、友の会で文学を共有していく場を作つていきたいと思つています。

友の会随想

仙台文学館開館15周年おめでとうでございます。文学館に大変お世話になっております。第二の人生を豊かに充実してくれているのが、文学館なのです。

平成8年、主人と共に地方公務員を定年退職し、38年間勤めた雪国秋田の地を脱し、気候温暖な利府に移り住んで17年。

全然知らない土地での第二の人生の出発は先ず友達づくりからと、利府の女性合唱団と、宮沢賢治の童話を朗読する会に参加。

利府の住人として落ち着いた頃、平成18年仙台文学館初代館長の井上ひさし

んの文章講座を受講。課題として出された「今までで一番笑ったこと」という400字の文章に対し、文末に赤ペンで、先生独特の丸文字で「堂々とした骨格の



第二の人生を文学館と共に

友の会会員 山内 則子

ました。」と、記されているではありませんか。何と素晴らしいことでしょう。文章を書くことに喜びを感じ始めた貴重な記念すべき講座でした。このあと、クマガイコウキさんの表現をみたくコースにも

参加しました。

平成19年から始まった仙台文学館ゼミナールには、佐藤通雅先生の「賢治講座」に、初めから続けて受講しています。利府町の文化祭で年一回、賢治作品の朗読

を仲間と発表し続けていますが、通雅先生の解説を生かしております。平成20年からは、文学館友の会会員となり、小さな文学の旅を毎年、首を長くして待ち、楽しんでおります。

このほか、毎年の企画展には友達を誘って出掛け、レストラン杜の小径でランチをし、すっかり三山タエ子さんとも仲良くなりました。渡辺祥子先生の朗読講座や、雪石隆子先生の川柳講座を受講、一年の終わりは「仙台朗読祭」へ、賢治作品の朗読を震えながらも発表し続けています。

現在は、2カ月に1回の読書会に参加して会員の皆様の感想を聴けるのを何よりも楽しみに、ルンルン気分です。文学館通いをしております。

自然に呼応する生

第16回読書会 森 敦「月山」

山形県の地図を開くと、酒田・鶴岡を挟んで北に鳥海山、南に月山がある。鳥海山は日の山・生の山と呼ばれ、月山は月の山・死の山と言われたようである。

月山を舞台にしたこの作品は、昭和49年、作者が61歳で芥川賞を受賞した作品である。

微妙に変化する音響のような紅葉の中を男はやってくる。この他所者は、じさま一人が守る月山の破れ寺に身を寄せ、祈禱簿を張り合わせて作った蚊帳の中で繭のように暮らす。閉ざされた集落の人々と交わりを持ちながら厳しい冬を越

し、やがて帰ってゆく春までの間、男は何を思っただけで過していったのだろうか。読後の感想は、「なんだかよくわからない」「特別に何か起きるわけでもなく、飽きてしまった」「男の葛藤のようなものも描かれず、読書会がなければ自分では読まなかった」「目的も無いような暮らし方」「無責任な男」などと、始めに辛辣な意見が出された。

しかし、読み込むほどに見えてくるものがあるとの感想もあり、話し合えば深まる。「楢山節考」(深沢七郎)の世界に通じるものがあることや、方言の響きに

懐かしさを感じる人もいた。現実ではなく、曇りガラスから見えるような世界と表現する人もいた。男が見ている住人と、住人が見ている男の関係も話題になる。貧しいながら自然を受け入れて生きる土地の人々の生活は、不思議にさえ思われる。作者の感性が光る場面もそここにあり、独特な世界をのぞかせてくれる作品である。

参加者が持参した芥川賞受賞発表時の古い雑誌もめずらしい。新会員2名を迎えての読書会は10名出席の実に楽しい会であった。(佐)

次回読書会は12月10日(水)14時
小島信夫「アメリカンスクール」
新潮文庫



今年の仙台文学館友の会文学散歩は榴岡天満宮の俳諧碑めぐりであった。10月30日、参加者15名は雲ひとつない秋晴れの下、天満宮境内に集合した。秋晴れの下、天満宮境内に集合した。秋晴れの下、天満宮境内に集合した。

秋の文学散歩 榴岡天満宮 俳諧碑林を見学 俳人の渡辺さんとともに



榴岡天満宮で記念撮影

・横田 禾月
世に競べ身にくらべけり竹の露
当時の全国区の俳人から、仙台の俳人の句まであり、渡辺さんの解釈に助けられながら、古俳句を鑑賞することが出来た。句碑を巡り終えて、境内を眺めると、樹齢300年のシラカシ(仙台市保存林)がどっしりとした幹で立ち、枝葉は境内の半分を蔽うほどだった。改めて句碑に流れた途方もない時間を感じさせられた。

次に隣接する榴岡公園内にある仙台市歴史民俗資料館に移動し、学芸員の畑井さんから説明を受けた。建物は明治7年に建てられ、主に兵舎として利用されて来たものを、復元保存している。悲惨な戦争の話などを聞き、展示品もひとつと見せて貰うことになった。

昼食会場は仙台サンクラブザインレストラン。適度な広さの部屋、ゆつたりとしたイス、テーブルで快適な昼食となった。

昼食後一人一人今日の文学散歩の感想を述べた。こんな近くに文学の名所があることに驚き、渡辺さんの軽妙洒脱な説明と相まって、有意義な時間であった、という感想が大半であった。

- ・松尾芭蕉
- ・あかあかと日
- ・はつれなくも秋の風
- ・各務蓮二
- ・十三夜の月見やそらにかえり花
- ・大鳥夢太
- ・五月雨やある夜ひそかに松の月
- ・雲裡坊
- ・羨めど崩れて見せる牡丹かな
- ・遠藤日人
- ・道ばかり歩いてもどる枯野かな

第55回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・佐藤裕之介さん(登米市) 晩翠あおば賞・金森悠夏さん(仙台市)

仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第55回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月26日、仙台文学館で行なわれた。

晩翠わかば賞は、登米市立横山小学校3年佐藤裕之介さんの「まほうのつなみ」。晩翠あおば賞は、聖ウルスラ学院

長年にわたって、児童教育に力を注ぐと共に、宮城の児童文化活動を牽引し続けた、おてんとさんの会長・富田博氏が、6月27日に95歳で逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。合掌。

富田博さんを悼む

富田博さん 会員 浜野 重風

「浜野君、身は離れていてもそれぞれの中でベストを尽くそう。君は銀星さんと共に奉仕活動ボランティアでできる幸せに感謝し継続し、自ら鍛え合い磨き合うことを忘れずに」と。昭和45年秋仙台で「第八回話す童話全国協議会」開催の折、言われた言葉を一生胸に刻みこんでいた。

ボランティアサークルこだま会はじめ北日本児童文化協会主催の行事には必ず挨拶に見え、語り部の佐々木健さんと談笑されていたことが忘れられない。また緑川銀星追悼慰問にもかけつけ、

英智中学校3年金森悠夏さんの「私の葉」に決まった。応募作品は東北地方と仙台市内姉妹都市である大分県竹田市の小・中学生から、総数1143編。ほかに優秀賞に選ばれたのは以下のとおり。晩翠わかば賞優秀賞は、宮城県亘理町・石垣誠さん、宮城県大崎市・鈴木玲亜さん、青森県八戸市・最上真名佳さん。晩翠あおば賞優秀賞は、仙台市・門脇あすかさん、福島県須賀川市・関根妃奈乃さん、仙台市・橋本哲平さん。

わざわざ来仙された東京童話会のみなさんへの応援協力されたことも言葉に言い尽くせない。「八幡の杜」で開かれた口演童話の勉強会で「浜野君ジュエスチャーが多すぎ折角の話を邪魔している」と指導いただいたことが昨日のように思い出される。震災直後、石巻市門脇小学校に図書を寄贈された屋代定男氏(元東京童話会会長・現業つば便発行)の口演ボランティアを企画させていただいた時、体調の悪いのに東二番丁小学校の会場まで歓迎にお出で下さったほか「これから長旅の運転、奥松島へ石巻の被災地小学校ボランティアだ気をつけるんだよ」と耳元に、そして「これは途中のおやつだ。みんなによろしく」と私の懐に。あの時の先生のやさしい思いやりの笑顔は生涯忘れることができない。

富田先生ありがとうございました。今までの数限りない励ましのお便りお言葉を大切に胸に秘め前進します。ここからご冥福をお祈りいたします。